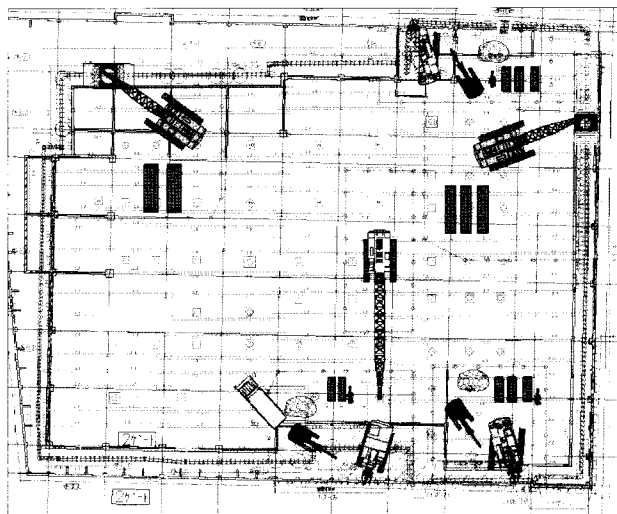




概要図

3. 施工方法

削孔方法としては、各工種共、ケーシングにて躯体（壁、柱、スラブ、耐圧盤等）を削孔し、その後、中掘りを各ツールにて掘削撤去した。掘削完了後、ガラ除去後の発生土とセメントミルク（現場練り）を混ぜ、埋戻しを行いケーシング引抜きで完了となる。

施工順序として、SMW機と同時期施工のため造成に支障のないよう移動を行い進めた。

4. おわりに

今回、紹介した施工例は非常に重機の錯綜するなかでBG工法の特長を生かした現場であった。特徴としては、ケーシングの押込み、引抜き、中掘りが本体機のみで行え、機動性が良いこと、境界よりの離隔距離が少なく施工できる等がある。

また、新型機種BG-28の能力が十分に発揮できた現場であった。

その他にも狭地や高架下等現場条件に制限のある場所における障害撤去や場所打ち杭等さまざまな活用ができる工法である。今後は、ますます制約されていく環境に適応し顧客のニーズを満足できるような施工を提供していきたいと思う。

（日本基礎技術（株） 技術本部 渡辺 元二）

MY TOWN

見どころ食べ処

— 関東編 —

[千葉の景観と料理]

千葉県には、年間3500万もの人間が利用する巨大空港、成田国際空港と年間1000万人も参拝者が訪れ、明治神宮に次いで、全国でも2位を誇る成田山新勝寺がある。江戸時代から庶民の信仰を広く集め現在も「成田不動様」と親しまれている成田山新勝寺は2009年には開基1071年を迎える古刹。

本尊の不動明王は平安時代に嵯峨天皇の勅願により弘法大師が彫刻開眼したもので、長く京都の高尾山神護寺に奉安されていたが、天慶2年(939)、この地に遷座され、成田山が開山された。

江戸時代の人気歌舞伎役者・初代市川團十郎が新勝寺に深く帰依して、成田屋を名乗ったことなどから庶民にも成田山詣が流行し、現在も多くの参拝客を集めている。

初詣や2月の節分会などは特に賑わう。境内には江戸時代に建立された国指定の重要文化財5棟をはじめ、立派な堂塔伽藍が立ち並び。

参道を抜けて、まず参拝客がくぐるのが、成田山開基1070年を記念して2007年11月に落慶した総ケヤキ造りの総門（楼門）。ピカピカの新しい門に思わず背筋が伸びる。掲げられた「成田山」の揮毫は現在の21代貫首・橋本照稔大僧正による。

石段を登った先にあるのが仁王門。門の手前には亀などがいる仁王池があり、生き物の生命をいとおしむ「不殺生」の教を伝えている。境内入口で伽藍守護の役目を果たしている。大提灯は魚河岸による奉納。

正徳2年（1712）に建立された高さ25mの三重塔（さんじゅうのとう）。修復工事によって鮮やかに蘇った各層の軒の内側に描かれた雲水紋の華麗な彫刻にも注目しよう。国指定重要文化財。塔内には五智如来が奉安され、周囲には十六羅漢の彫刻が施されている。

昭和43年（1968）に建立された大本堂は最も重要な御護摩御祈禱（不動明王をご本尊として、その前に護摩壇を設け、護摩木という薪を焚く。護摩木は煩惱を象徴しており、不動明王の智慧の象徴である護摩火に投入することによって、煩惱を浄化し、願いを成就させる真言密教の秘法）が行われる中心道場。

大本堂は有名タレントや役者、力士などが豆まきをする節分会の舞台。

安政5年（1858）に本堂として建立された建物が釈迦堂（しゃかどう）。堂の周囲には五百羅漢や二十四孝の彫刻がはめ込まれ、江戸時代後期の寺院建築の特色を今に伝えている。総ケヤキ造りで、国指定重要文化財。現在は厄除けお祓い祈禱所として使用



大本堂と三重塔

されている。

奉納された絵馬や額をかけるための建物額堂（がくどう）。文久元年（1861）の建立。堂内では、七代目・市川團十郎像や明治時代に造られた青銅製大地球儀なども見る事ができる。国指定重要文化財。

元禄14年（1701）に建立された建物光明堂（こうみょうどう）は、かつては本堂として使用されていた。堂内には大日如来、不動明王、愛染明王が奉安されている。国指定重要文化財。

毎年5月、この堂の前庭にて「成田山新能」が奉納される。昭和59年（1984）に建立された高さ58mの平和の大塔（へいわのだいどう）。1階は般若心経の写経道場。成田市内からも見ることができる塔は高台に立っている。

お願い事や、ご先祖様の供養をするために行うのが写経。写経会が行われる道場に入る前に、塗香（ずこう）で身を清める。輪袈裟（わげさ）をかける。薄く印字された上をなぞるので、初心者でも大丈夫。文字をなぞるだけでなく、心を込めて正しく書き順で書くことが大事。静かな空間で筆をすすめると、いつのまにか無心になり、終わる頃にはスッキリした気分になるとか。写経は脳の活性化にもいいとか。

成田山新勝寺の身代りお守り。身代守は本尊である不動明王の分身とされ、天保2年（1831）に仁王門が再建された際、大工の一人が足場から転落したが、成田山の焼き印が入った札だけが割れて、助かったという逸話も残る由緒正しいお守り。

成田山新勝寺詣の歴史とともに発展した成田の伝統和食。